

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06677

研究課題名(和文) ガンダーラ仏教彫刻における生天思想の造形 - ディオニューソス神関連図像を中心に

研究課題名(英文) Visualizing the Thought of Rebirth in Heaven on Gandharan Buddhist reliefs by focusing on the Dionysiac Imagery

研究代表者

田辺 理 (TANABE, TADASHI)

早稲田大学・文学大学院・助手

研究者番号：40757209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は、国内外の博物館、美術館を巡り、ギリシア・ローマ美術とガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属の図像を中心に、可能な限り幅広く資料収集し、考察を行った。その結果、ギリシア・ローマ美術においては、多くのディオニューソス神と眷属の神話に関わる図像があるのに対して、ガンダーラの仏教彫刻においては、ディオニューソス神と眷属の飲酒饗宴図や交歓図が圧倒的に多いことが判明した。さらに、仏典の叙述から、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属の図像が仏教の来世観である生天思想に関連していることを解明した。

研究成果の概要(英文)：According to my research project, I visited several museums in Japan and overseas in order to collect research materials related to Dionysos depicted both in Greco-Roman art and Gandharan sculpture. As a result, it became clear that there are exclusively plenty of images depicting drinking and fraternizing scenes of Dionysos and his followers in Gandharan sculpture while in Greco-Roman art are represented many types of Dionysiac myths. Furthermore, by referring to descriptions of Buddhist sutras, I clarified that the Dionysiac imagery depicted on Gandharan sculpture is related to the Buddhist thought of rebirth in heaven after death.

研究分野：美術史

キーワード：ディオニューソス バッカス ガンダーラ 生天

1. 研究開始当初の背景

パキスタン北部のガンダーラ地方では、ほぼ1世紀から3世紀にかけて仏教的な内容をギリシア・ローマ美術の技法で造形化した折衷・混淆の仏教彫刻が多数造られた。この仏教彫刻の未解明な部分の一つに、一見しただけでは仏教と関係があるか否かわからないような図像(以下非仏教的な外観の彫刻と呼ぶ)がある。それらは明らかにギリシア・ローマ美術の影響を示すものであって、例えば葡萄酒の神であるディオニューソス神と眷属の飲酒饗宴図(図1)や、男女が交歓するエロティックな場面を表現した図像、エロースの図像、ケートスやトリートン、イクテュオケンタウロスなどの、海の家獣と呼ばれる図像などである。



(図1)

従来のガンダーラの仏教美術の研究は、仏陀像や菩薩像、仏伝図のような、一見しただけで仏教と関連していると判明する仏教的な外観の彫刻を中心として行われ、非仏教的な外観の彫刻は、仏教と無関係と見なされ、その意義を積極的に考察してこなかった。ところが、近年、非仏教的な外観の彫刻に仏教的な意義を見いだす研究が行われるようになったのである。

2. 研究の目的

本研究は、ギリシア・ローマ美術に見られるディオニューソス神と眷属の図像と、ガンダーラ仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属の図像を比較し、後者の図像が仏教の来世観である生天思想を造形化したものであることを解明するものである。

3. 研究の方法

本研究は、以下の四つの手順を踏んで行った。

(1) ギリシア・ローマ美術に表現された、ディオニューソス神と眷属に関連した図像を幅広く収集し、それらをテーマ別に分類・整理した。

(2) ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属に関連する図像の分類・整理を行う。ガンダーラの仏教彫刻では、例えば、葡萄唐草文、葡萄収穫、葡萄酒の製造、ディオニューソス神と眷属による飲酒饗宴図、交歓図など、葡萄に関連する図像が極めて多い。それ故、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属に関連

する図像をテーマごとに分類・整理し、そのテーマの種類と特殊性を明らかにする。

(3) 上記の(1)と(2)で分類・整理したテーマの種類を比較して、ガンダーラで受容されたテーマと除外されたテーマを明らかにする。つぎに、受容されたテーマについて何故、そのテーマがガンダーラの仏教徒に受容されたのか、その理由を明らかにする。

(4) (3)の考察によって明らかにした、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神に関するテーマが、『世記経』や『正法念処経』などの仏教経典に記述された仏教の来世観、特に生天思想に対応しているか否かを検討する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

国内外の博物館、美術館における作品収集本研究を遂行するためには、ギリシア・ローマ美術に表現されたディオニューソス神と眷属の図像の実見調査及び写真撮影を行うことによって、資料を増やさせなければならなかった。そのために、国内外の博物館と美術館を巡り、実見調査や写真撮影を行った。

平成27年度には、主にイタリアのローマを中心に博物館や美術館を巡り、考察に必要な資料の収集及び実見調査を行った。訪問した博物館は、ローマ国立博物館、バチカン博物館、カピトリノ美術館、ディオクレティアヌス帝の浴場跡、ローマ近郊のベレトリの考古学博物館などである。これらの博物館では、ディオニューソス神と眷属を表現したギリシアの陶器画や帝政ローマ時代の石棺の細部を写真撮影した。さらに、このような作品調査を行う一方で、ローマのドイツ考古学研究所を訪れ、日本では入手困難な論文や著書のスキャン、複写を行った。また、レプティス・マグナや、パールベック、アフロディシアスなどの帝政ローマ時代の遺跡に残された列柱に表現されたディオニューソス神と眷属の図像の写真資料を入手した。

平成28年度には、ミュンヘンの彫刻館(Glyptothek)及び古代美術博物館(Antikensammlung)を訪れ、ギリシアの陶器画に表現されたディオニューソス神の神話に関連する図像の写真撮影、帝政ローマ期の石棺の写真撮影を行った。さらに、ミュンヘン五大陸博物館(Museum Fund Kontinente)を訪れ、ガンダーラの仏教彫刻の実見調査及び写真撮影を行った。本博物館の作品は、日本においては殆ど知られておらず、貴重な写真資料を入手することができた。さらに、再びローマを中心に作品調査を行った。この調査では、ボローニャ大学のピエール・フランチェスカ・カリエーリ教授の指導と案内の下で、ローマ近郊のティボリ

(Tivoli)にあるハドリアヌスの庭園、ローマ市内にある聖 John・Paul 教会を訪問し、ディオニューソス神と眷属の神話に関連する壁画の調査及び写真撮影を行った。

資料の考察結果

資金獲得後から、計画通り、ギリシア・ローマ美術に見られるディオニューソス神と眷属に関連する図像の分類及び整理を行った。ギリシアの陶器画においては、ゼウスの大腿から生まれるディオニューソス、赤子のディオニューソスをニューサのニンフ達に預けるゼウス、船上でディオニューソス神を襲ってきた海賊達をイルカに変えてしまった逸話、ディオニューソス神の大理石製のマスク、踊るディオニューソスとメナド、踊るマイナスたちなどの多くのテーマが表現されていた。また、ローマ帝政期の美術においては、ディオニューソス神の凱旋図、ヘルメスに抱かれる幼児のディオニューソス神、ディオニューソス神と眷属の飲酒饗宴図、ディオニューソス神と眷属による熱狂忘我の舞踏図、ディオニューソス神の単独像など、非常に数多くのテーマが見られる。これらの図像は、ディオニューソス神の神話に関連するものである。

つぎに、ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神に関連する図像の分類及び整理を行った。ガンダーラの仏教彫刻に見られるディオニューソス神と眷属に関連する図像は、ディオニューソス神と眷属による飲酒饗宴図、交歓図などであった。ガンダーラの仏教彫刻においては、ディオニューソス神の神話に関連する図像は殆ど見られず、むしろディオニューソス神を象徴する葡萄酒に関連するものが殆どであった。これは彫刻家が意図的にディオニューソス神と眷属の神話を表現した図像を除外し、葡萄酒に関連するテーマを取捨選択した結果であると考えられる。

つぎに、ギリシア・ローマ美術に見られるディオニューソス神と眷属の神話を表現した図像が、ガンダーラ仏教彫刻において除外され、飲酒饗宴図や交歓図などに関連するテーマのみが選択された理由を考察した。

元来ディオニューソス神は、葡萄酒の神として有名であるが、野生の動植物の神でもあり、豊穡多産、生成繁茂、再生復活の神でもある。ディオニューソス神は、葡萄酒の神として崇拝されているが、葡萄の房は多くの果実よりなるので、ディオニューソス神は大地の豊穡多産を象徴し、豊穡信仰にも関係するようになった。また、元々植物は春がくると緑を茂らせ、秋がきて枯れ、再生と復活を繰り返すので、ディオニューソス神と眷属が住む世界は、信者たちが死後にそこに再生、復活し、マイナス、メナドなどとたわむれ、飲酒を行い、悦楽を永遠に享受できる楽園とも見なされるに到った。即ち、ディオニューソス神とその眷属の飲酒饗宴図や交歓図などは、

死後の楽園における再生・復活に関係するものである。

つぎに、このようなディオニューソス神の職能と共通する内容が仏教經典の叙述と対応するか否かを考察した。そのために、『世記経』や『正法念処経』、サンスクリット本『端正なる難陀』などの仏教經典に記述された死後に仏教徒が赴くといわれている天界に関する記述を博捜し、参照した。例えば、『正法念処経』には、天界の三十三天において、天女と天子たちが、摩偷と呼ばれる酒を飲んでいる。次に、サンスクリット本『端正なる難陀』の巻10から巻11では、釈尊は甥の難陀を出家させるために、難陀を三十三天にあるインドラの森に連れて行き、そこに住む美しい天女アプサラスを見せ、出家すれば生天した後にこのような天女から与えられる悦楽を享受できることを説いている。

これらの經典の記述から、飲酒及び性愛行為が、天界において行われていることが判明する。すなわち、飲酒饗宴図、交歓図などはディオニューソス神の楽園の情景と直接対応しており、死後仏教徒が赴く天界の情景に関連するものであると考えられる。

この研究の成果は、期間内に論考を作成して雑誌に投稿することができなかったが、今後投稿する予定である。

さらに、このような研究に関連するボストン美術館所蔵の縦型浮彫(図2)を考察した。

本彫刻は、平成27年度の早稲田大学において、特定課題研究助成費において提供された資金を用いて実見調査を行い、さらに本研究費で得た資料も用いて考察を行った。

この縦型浮彫には、葡萄の蔓によって形成されたメダイヨンの中に、リュトンをもって酒を飲む男、女性の胸に手を触れる男、葡萄を収穫する男、葡萄を踏む男、狩猟する男が表現されている。

実見調査によって、石灰の結晶であるパティナが彫刻の表面に固着している

ことが判明し、この彫刻が贗作ではないことが明らかになった。さらに、この彫刻の左右



(図2)

の側面に柄があることが判明した。この二つの柄の凹型の底の部分には、パティナが付着しているため、この柄は近年になって施されたものではなく、この彫刻の制作当初からあったものであることがわかる。おそらく、この彫刻を立てた時に、倒れないように壁に固定するための柄であろう。一方、彫刻に向かって右側の側面にも、正面から見た時には殆ど見えないが、真ん中と上方に小さな柄がある。左側の側面と異なり、柄に深い穴が空いているので、L型の留め金や石材などを挿入するようになっている。これらの柄の存在によって、この彫刻が片蓋柱のように左右の壁に固定されて立てられていた、ないしは、建物の入口や門の左右どちらかの側面にこの彫刻が固定され、側面部分を装飾していたことが明らかになった。

さらに、本彫刻に表現された人物の図像を、リビアのレプティス・マグナ、レバノンのパールベック、シリアのパルミラ、トルコ南西部のアフロディシアスなどの地域の同様の図像と比較考察した。これらの資料は平成27年度のローマのドイツ考古学研究所で入手したものである。それによって、この彫刻のスタイルがローマ美術の影響を受けたものであることが明らかとなった。

また、本彫刻に表現された人物像は、全てディオニューソス神と眷属に関連することを明らかにした。ただし、リュトンで酒を飲む男、女性の胸に手を触れる男、葡萄を収穫する男、葡萄を踏む男に関しては、全てディオニューソス神と眷属による飲酒饗宴や交歓の図像などとの関連が指摘できたが、狩猟図のみ当初どのような関連があるのか不明であった。そこでミュンヘンにおいて現ライプツィヒ大学教授モニカ・ジン氏と会い、研究内容について助言を求めた結果、これらが楽園に関連することが判明した。

その結果、ボストン博物館所蔵の縦型浮彫に表現された図像は、全て死後の楽園を表現していることを明らかにした。さらに、仏教経典との比較考察から、本彫刻に表現された図像も仏教における来世観、生天した天界にある楽園の情景を表していることと結論づけた。

さらに、ガンダーラにおいては、グレコ・ローマ美術的なディオニューソス神と眷属の図像とその職能を知っていた彫刻家が考える楽園を表現したと考えられる。すなわち、天界には誰も行ったことがないので、仏教に於ける楽園である天界を実感させる、ないしは仏教における楽園である天界の情景を可視化して説明するために、ギリシア・ローマ美術のディオニューソス神の楽園の図像を借用したのであると考えられる。

この研究の成果は、2016年7月16日に武庫川女子大学において開催された The 4th International Conference on Archi-Cultural Interactions through the Silk Road (iaSU2016 JAPAN)において英語にて発表し、2017年3月4日に早稲田大学にお

いて開催された早稲田大学美術史学会例会において、さらに資料を追加し、変更した内容を発表した。今後、論文にまとめ投稿する予定である。

予期していない事象により得られた成果
平成28年度においては、当初の計画では、トルコのイスタンブール考古学博物館、イズミール考古学博物館、パムッカレの考古学博物館、アンターキア(ハタイ)の考古学博物館を訪問する予定だったが、昨今の情勢を鑑みて、トルコ調査を中止し、イタリアのローマを中心に再度調査を行った。平成27年度にもローマを訪れているが、その時とは殆ど異なる場所を訪問した。その結果、平成27年に実見調査をした際に入手した資料とは、全く異なる資料を入手することができたので、結果として資料の種類を増やすことができた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の特色は、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻の図像と、ギリシア・ローマ美術の図像とを比較することによって得られた成果に照らして、仏教経典中に見られる生天思想の視点から解釈する点にある。特に、仏教経典に記述されている来世観の中でも、生天思想に関わる記述とガンダーラのディオニューソス神と眷属の図像を結びつけて解釈する研究は、申請者がこれまで行ってきた研究であるが、特に本資金を用いて、その基礎的な研究を行うことができた。

さらに、本研究では、ガンダーラの仏教彫刻にみられるディオニューソス神と眷属の図像が仏教的な内容を表現するという結論を導き出すために、ギリシア・ローマ美術を用いて、東西文化交流史的な比較考察のみならず、仏教経典などの文献資料を用いている。それ故、本研究の結論は、美術史学のみならず、インド学・仏教学の学問分野においても、少なからぬ貢献をなすものであると考えられる。

(3) 今後の展望

本研究では、主にディオニューソス神と眷属の図像の中でも飲酒饗宴図や交歓図などの葡萄酒に関連する図像を中心に考察を行った。今後は、ガンダーラ仏教彫刻に見られる葡萄唐草文、木蔦文や、花綱などの植物文や、エロースや童子(プット)などの図像について考察を行う予定である。葡萄唐草文や木蔦文はディオニューソス神と関連が深く、花綱は再生復活を示すといわれている。また、エロースや童子は靈魂の導師ともいわれており、ディオニューソス神と眷属の図像と関連が深い。そのため、これらの図像も単なる装飾ではなく、仏教の来世観と関連している可能性があり、その妥当性を検証する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

田辺 理 「ガンダーラの仏教彫刻の人物葡萄唐草文の楽園と造形 ポストン美術館蔵品を巡って」, 2016 年度早稲田大学美術史学会春季例会、2017 年 3 月、於早稲田大学

Tadashi TANABE, "Peopled Vine Scroll in Gandharan Sculpture," The 4th International Conference on Archi-Cultural Interactions through the Silk Road (iasU2016 JAPAN), 16July, 2016, Mukogawa Women's University

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

田辺 理 (TANABE Tadashi)

早稲田大学・文学学院・助手

研究者番号: 40757209